

## 明治の二つの魂 一西 忠義と田中正造

西 忠義。生前から神として祀られ、日高の開発に力を尽くす。道路を開設し、橋をかけ、航路を開通させる。教育の振興はもちろんのこと、産業の振興のために諸業の組合の設置、産業共進会の開催、産馬改良機関の設置、国有牧場の誘致など、偉大な事蹟を残した。当時の彼を知る者は、和人、アイヌ人を問わず、多大なる尊敬を寄せていたという。

西は安政三年（一八五六）、会津に生まれた。幼いとき戊辰（ぼしん）戦争に遭遇し、愛する兄たちを戦いで失う。三男の身で家を継がなければならなくなった彼は、母とともに筆舌に尽くしがたい苦労を重ねた。明治二年に斗南（となみ）藩立飯寺幼学校や小山小学校に通い、明治五年になると、若松中学予備校へ入った。学業にいそしむかたわら、会津藩士のもとで儒学や書道を学ぶ。当時の会津藩というのは他の藩とはちがって、とくに幼児教育を熱心に行う独特な教育方針をとっていたから、西少年も厳しいスパルタ教育を受けなければならなかった。年長者のいうことに背いてはならない、年長者にはお辞儀をしなければならぬ、嘘をいってはならない、卑怯なふるまいをしてはならない、弱い者をいじめてはならないなど、会津藩士の生き方や根本精神を嫌というほど叩き込まれた。おそらくこのときに培われた精神が、後年の西の生涯を決定づけたものと思われる。

明治八年、二十歳になった西は、若松県（後に福島県に編入）の官職につくなり、しだいに頭角を現わしはじめる。翌年、久子を妻に迎え、同十年福島県会開催議員に選ばれ、その後は福島県庁に勤めたり、樺山郡長に任ぜられたりして、数多くの仕事に着手する。

彼が手腕をふるった主な仕事を列挙してみよう。一つは「福島県会沿革誌」の編纂である。毎日の公務をこなした上で、夜、自分の時間をさいて原稿一万枚以上にものぼる大冊子をまとめ上げた。完成まで百日余りの日数だった。

二つめは足利機織（はたおり）業界パニックの救済である。足利地方の機業界において不渡り手形が発行されてしまった結果、二、三の銀行が貸し出しを停止。そのため一般の取引まで不能におちいり、機業界は騒然となった。西はただちに善後策を練り、新たに三井銀行支店を設けて、資金を融通するよう各方面の説得に奔走する。やがてそれが功を奏し、他の銀行にまで波及し、経済パニックは沈静化した。

三つめは、足利学校遺跡の保存である。戸田藩主が管理していた“足利学校”は、廃藩後、荒廃するにまかされ、歴史的に貴重な古文書類は役場の土蔵の中に死蔵され、“大成殿”なども物置同然の扱いを受けている始末であった。このような無神経な取扱い方をみて心を痛めた西は、有志を募り、遺跡保存会を創設したのであった。

明治三十年、当時の松方内閣を崩壊させるほどの事件が持ち上った。これが世にいう“足尾鉍毒事件”である。明治二十年、渡良瀬（わたらせ）川下流一帯の農村を襲った足尾銅山から流れ出た鉍毒は、栃木県はもとより、群馬、茨城、埼玉にある田畑に大被害を与え、作物がすっかり枯れてしまう悲惨な状態をもたらした。

明治二十三年の大洪水のときはとくにひどく、渡良瀬川流域の魚は死に、草木は枯れ、家畜も倒れ、農民たちのなかにも病気になって死ぬ者が出るという、地獄絵図のような惨状になった。原因は銅の

精錬のときに出る鉱滓（こうさい）のタレ流しと、亜硫酸ガスがふくまれた煙のせいである。鉱滓は川を汚し、煙は山々の樹木を枯らす。百年以上たった平成の今でも、足尾の山は風化したまま死んだ状態になっている。

このような惨状をみかねたのが、代議士の田中正造（しょうぞう）であった。彼はこれを問題化し政府に迫ったが、富国強兵を維持するために銅の生産を不可欠とする政府は、いっこうに解決を図ろうとしない。これに業を煮やした彼の行動は、明治天皇への直訴という形に爆発する。

「お願いがござりまする。天皇陛下、お願いがござりまする……」

旧幕時代なら磔（はりつけ）になるほどの重罪である。死を覚悟したこの闘士の行動に着目したマスコミは、田中を義民として書きたて、世論は沸き返った。

この歴史上に名高い田中正造に、西 忠義は出会っている。明治三十年五月、栃木県の足利郡長を勤めていたときのことである。西の耳に突如伝令が入った。「田中が来ます！」そういわれても西は動ずるふうもない。中村内務次官や横山内務大臣の被害視察に同行して、被害の様子はすでに熟知しており、大臣にも救護策を進言していることもあって、時の英雄だろうとも恐るるにたりない。しばらくして田中正造がくだんの黒紋つき姿で現われ、郡長室へ入ってきた。西の目にはそれが無礼に映った。

「どのようなご用でしょうか？」と西。

「話し合いに来たのだ。あなただけではおわかりにならないから、担当の課長を呼んでいただきたい。お尋ねしたいことがある」と怒りをあらわにしている。

「課長はただいま公務のため外出中でありまして。お話があるのでしたら受付の方へ申して下さい。……あなたは衆議院議員であって、人民の模範となられるお方でありまして。そのような方が、地方役所で色々おっしゃったところで、どうにもならないことはすでに御存知のはず。ここは行政の出先機関の一つであって、立法府ではありません」

「畜生奴！逃がしてしまったか——」

「それとも、私で何かお答えできることでもございましょうか……？！」西が続ける。

さすがの田中正造もこれには驚いて、“やかましい郡長だ”とつぶやき、さらにこう付け加えた。

「では郡長にお聞きしたい。ここへは古河市兵衛から金が流れてきてはおらんのだな」古河市兵衛とは銅山の経営者のことである。鉱毒を流した張本人だ。事件のもみ消しに政府や県知事らに金をばらまいたとの報道がなされていた。

「ぜったいにありません」

「ほんとうか？」

「ほんとうですとも」

西はきっぱり否定した。

「被害地の惨状は心得ているはずだが、君はどう対応するつもりだ」

「救護策は用意しております。川の堤防工事をはじめ、被害民には免税の処置を講ずる予定です」

田中は西の説明に納得したのか、首を縦にふるとその場を去っていった。

西が実際にどのような救護策を行ったのか詳しくは分からない。しかしこの事件については、西は山林の乱伐が鉱毒流失を引き起こしたのであって、鉱山そのものに原因があるのではないと考えていたらしく、かつまた田中正造についても、改進黨の策略に躍らされた人物とだけみていたようである。公平に評すれば、残念ながら西の見解は的はずれだったように思われる。

日高実業協会が出した「西 忠義翁徳行録」を読んでも、西は田中正造のように操業停止を訴えかけたようすはない。しかし徳行録によれば、足尾鉍毒事件について尽力した理由で、明治三十一年、国から報奨金をもらったという。被害者の救済に力を尽くしたからなのか、国益のために協力したからなのか、その辺のところはよく判らない。いずれにせよ明治三十五年になっても、政府の対応ははっきりせず、営業停止もさせていないという事実は歴然としてある。鉍毒は流れ、被害は広がり続けている。明治三十年、鉍毒事件の責任をとって農商務省の榎本武揚は辞任し、その一年後の明治三十一年には、西は桧山支庁長に任ぜられている。さまざまな憶測が可能だが、いずれにしろ、このことが日高の大恩人の出現となった。

彼の治績に会津戦争の影はなく、明治という時代に、国の大義に殉じて行こうとする有能な一官吏の姿が残るだけである。その人となりはやはり明治の一つの典型であった。

[文責 高田]

#### 【参考】

西 忠義翁徳行録 昭和八年 日高実業協会  
少年会津藩士秘話 一九七五年 国土社  
日本の歴史 五 一九七七年 ほるぷ出版  
日本と日本人—近代百年の生活史 昭和五十年 講談社